

絵画と会計の言語性について

チョン ジェ ムン
全 在 紋

I はじめに

しばしば、会計（accounting）は「企業の言語」（the language of business）と評言される。日本人は日本語で相互に意思疎通する。アメリカ人は英語で相互に意思疎通する。それと同じように、ビジネスマンは会計で相互に意思疎通している。そう解しての評言である。

この場合、日本語や英語が言語であることには同意できても、会計が言語であるとはどういうことか。首をかしげる向きがあるかもしれない。この点は、少し補足説明しておく必要がある。

言語（広く記号）と言われるものの定義的特徴は、「意味を持つこと」である。換言すれば、意味を持てば、それは言語（広く記号）なのである。言語学界の定説である。そして、そうした意味の共有があってはじめて、人間は相互に意思疎通（コミュニケーション）が可能となるのである。

会計を行なうにあたり、複式簿記を採用する企業は多い。複式簿記は、言わば、企業の言語における文法に相当する。また、その複式簿記のルールにしたがう仕訳（journalization）は、企業の言語における文章（sentence）に相当する。

仕訳すなわち企業の言語における文章の意味は、複式簿記を学んだことのない人びとには分からない。しかし、複式簿記を学んだビジネスマン（企業

人)なら理解できる。つまり、ビジネスマンの間でなら仕訳に対する「意味の共有」現象が見られる。それゆえに、ビジネスマン相互で意思疎通(コミュニケーション)が可能となっている。以上で、読者にも、会計が言語と呼ばれる理由が了解されよう。

ちなみに、「スポーツは世界共通語」であるとか、あるいは「音楽は国際共通語」であるとか、われわれはよく耳にする。すなわち、スポーツや音楽も、言語であると言うのである。じっさい、サッカーやクラシックは、共に世界中の人びとを熱狂させ、あるいは大きな感動を与えている。「世界共通語」あるいは「国際共通語」として、国境を越えて多くの人びとの中で、プレーの意味が共有されていてこそその熱狂であり感動である。

周知のとおり、会計における仕訳(企業の言語における文章)の意味もまた、国境を越えて、世界中の多数ビジネスマンに理解されている。つまり、国際間で「意味の共有」現象が見られる。それゆえに、国境を越えての意思疎通(コミュニケーション)が可能となっている。会計また、企業の世界の「国際語」と称される所以である¹⁾。

さて、日常言語・会計・スポーツ・音楽の他に、「絵画」(painting)もまた、「言語」と呼ばれることがある。絵画が言語であるとは、とくに、作者によるキャンバスへの「対象の表現」(representation of object)を指しての呼称である。すべからく、「表現」には「意味」が込められている。したがって、対象の表現なら、それは明らかに言語行為である。また、対象の表現が言語行為であるならば、それは会計にも共通している。会計また、企業の財政状態や経営成績という対象を財務諸表というキャンバスに表現する言語行為だからである。

ただし、絵画と会計とでは、相互に異なるところもある。表現手段となる具体的な記号は相互に異なる。絵画は、色と線を記号とする。他方、会計は、文字(勘定科目)・数字(勘定金額)・罫線(勘定形式)を記号としている。

1) 青柳文司、「会計記号論の視角」、日本記号学会編、『ポストモダンの記号論■情報と類像』所収、東海大学出版会、1992年、133～134頁。

こうした、表現手段となる記号種こそ異なるものの、共に対象の表現すなわち言語行為である点で、絵画と会計は共通している。

日本と欧米の会計基準を国際比較する文脈で、われわれはこれまでに一部、絵画と会計の共通性について論及したことがあった²⁾。しかし、それは、必ずしも体系的なものではなかった。本稿は日本と欧米に加えて、韓国の会計基準をも含めた3者間国際比較の文脈で、絵画と会計の言語性について、多少とも体系的な論究をめざす試みである。

II 言語観の2類型

言語（広く記号）とは何か？ 上述のとおり、それは「意味を持つもの」である。この点までは、言語学界でも共通認識となっている。では、さらにもう一步踏み込んだ問い、「意味」とは何か？ 実は、「意味の意味」(meaning of meaning)こそ問題である。

「意味の意味」については、言語学界でも意見が分かれている。「意味実体論」(the theory of meaning as substance)と「意味関係論」(the theory of meaning as relation)とに大別される。前者は、言語の意味を自存的な実体(entity)と見る考え方であり、常識的な言語観である。後者は、言語の意味をば言語相互間の関係(relation)と見る考え方であり、ソシュール(Ferdinand de Saussure, 1857-1913)の言語観である。

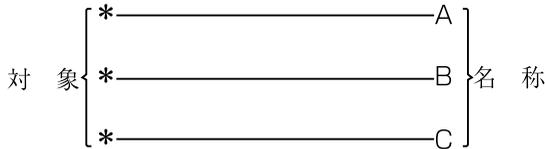
意味実体論によれば、言語(ないし言葉)とは、事物に付けられた「名前」である。すなわち、まず事物(対象)が先にあって、言葉はそれに後から付けられた名前(名称)であると見られる。この見方は、「言語名称目録観」(nomenclaturism, surrogationalism)と称されている。それは、われわれの日常経験(常識)ともよく合致するように見える。

意味実体論においては、対象と名称との関係は図表1のように考えられている。事物(対象)と名前(名称)とは、「一対一の対応」(one-to-one cor-

2) 拙著、『会計言語論の基礎』、中央経済社、2004年、282~283頁。

respondence) をなすものと見られている。

図表 1 対象と名称の関係図式



ソシュールによれば、上の図表 1 の考え方は誤りであるとされる³⁾。じっさい、意味実体論の破綻は容易に例証される。各国言語における類義語や時制を国際比較するだけで、たやすく判明する。

たとえば、蝶 (나비) と蛾 (나방) の識別は、日本人や韓国人には可能であるが、フランス人には不可である。フランス語では蝶も蛾も、‘papillon’ 一語で括られているためである。日本人や韓国人は、蝶を見たら「追い駆ける」。蛾を見たら「追い払う」。フランス人とは大違いである。フランス人には蝶と蛾で、際立った反応の違いは見られない。

フランス人はまた、犬 (개) と狸 (너구리) の識別も不可である。フランス語では犬も狸も、‘chien’ 一語で括られているからである。

蝶や蛾、犬や狸の例は、日本語や韓国語の方がフランス語よりも語彙の一部で木目がこまかいケースである。しかし、各国語間における木目の精粗は、ケース・バイ・ケースである。たとえば、時制 (tense) については、日本語や韓国語の方が欧米諸語より明らかに木目が粗い。日本語や韓国語には、現在形・過去形・未来形しかないが、英語にはそれら以外に「現在完了形」が存在する。読者にも、よく知られているところであろう。

また、フランス語では、過去形も木目こまかく識別される。たとえば、複合過去形 (瞬間的なもの) と半過去形 (継続・反復されたもの) との別があ

3) H. A. スリュサレヴァ (谷口勇訳), 『現代言語学とソシュール理論』(改訂版), 而立書房, 1989年, 113~114頁。

る。「私は昨日、彼女に会った」(“Je l’ai vu hier.”)というときは前者の過去形がとられ、「私はいつも、彼女に会った」(“Je la voyais souvent.”)というときは後者の過去形がとられる。日本語や韓国語では、過去形に対するこうした細分はない⁴⁾。木目の精粗は、当該言語を使用する民族それぞれの、価値観の違いを反映するものである。

韓国語と日本語は言語構造の似ていることで知られている。両者ともアルタイ諸語に属すとす説もある⁵⁾。それでも、事物(対象)と言葉(名称)の関係について、両種言語の比較によっても「一対一の対応」が成立しないことは、簡単に例証される。上述の日仏語間ないし韓仏語間の関係に類似の

図表 2 言葉と事物の関係(日韓対比)

日本語	(小父) おじさん (伯父・叔父)		
韓国語	아저씨	삼촌 (三寸)	
日本語	こいびと (恋人)	あいじん (愛人)	
韓国語	애인 (愛人)		
日本語	うわき(浮気)	(風) かぜ (風邪)	
韓国語	바람	감기	
日本語	はし (端・箸・橋)		
韓国語	끝	젓가락	다리

4) 一方、フランス語には、英語でははっきり区別される過去形 I sang (私は歌った)と現在完了形 I have sung (私は歌い終わった／歌ったことがある)の区別がない。

アンソニー・ロッジ (水嶋いづみ訳)、「フランス語って論理的?」、ローリー・パウワー＝ピーター・トラッドギル編、『言語学的に言えば…』所収、研究社、2003年、45頁。

5) 旧ソ連のチュルク語学者バスカコフ (N. A. Baskakov) らによる。

金昭東 (栗田英二訳)、『韓国語変遷史』、明石書店、2003年、325～326頁。

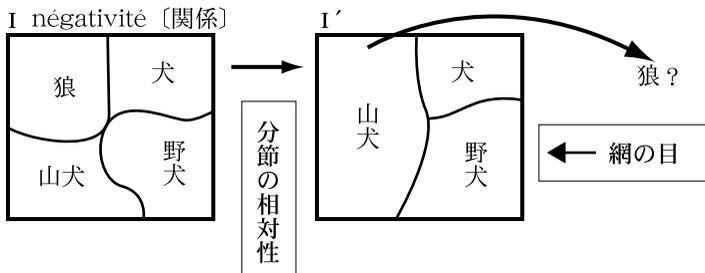
例を、日韓両言語間に求めれば、前ページの図表2のようである⁶⁾。

たとえば、日本語の「かぜ」は、吹く「風」を意味することもあれば、万病の元としての「風邪」を意味することもある。韓国語では前者は「바람」[pa:ram]、後者は「감기」[ka:mgi]と言われる。それでは「風」の意味の「かぜ」と「바람」[pa:ram]とがぴったり一致しているかということ、これもそうはいかない。「바람」[pa:ram]には「浮気」という意味も含まれているからである。こうした日韓両言語の比較だけでも、事物（対象）と言葉（名称）が元もと一対一で対応するものでないことは自明であろう。

他方、意味関係論では、言葉の意味は、同一の言語システム内における他のすべての言葉の意味との「関係」ないし「差異」によって決まると見られる。図表3を参照ねがう。

たとえば、一定範囲内に含まれる、ある種動物たちに対して、「狼」と「犬」と「山犬」と「野犬」という4語で識別を行なう言語システムがあるとする。これに対し、「狼」という語がなく、「犬」と「山犬」と「野犬」という3語で識別を行なう言語システムもありうる。「蝶」と「蛾」, 「犬」と「狸」, それに対する「papillon」一語や「chien」一語、上例の日本語とフ

図表3 言葉の意味は「関係」である



6) 本章の「図表3 言葉と事物の関係（日韓対比）」は、丸山の以下の箇所（日仏対比）をアレンジしたものである。

丸山圭三郎, 『言葉とは何か』, 夏目書房, 1994年, 93頁。

ランス語の比較からも、そうした競合システムの並存はかならずしも非現実的な仮定にあらざること、読者にも異存はないことであろう。

この場合、意味関係論においては、ある語（記号）の意味は、他のもろもろの語（記号）の意味との〈差異〉でしかない。図表3のIについて言えば、左側の、「狼」という言葉のある言語システム社会においては、「狼」は何らかの自存的な実体（動物）を意味するのではない。「狼」とは、「犬」でもなく、「山犬」でもなく、「野犬」でもない動物の謂である。「犬」とは、「狼」でもなく、「山犬」でもなく、「野犬」でもない動物の謂である。また、「山犬」とは、「狼」でもなく、「犬」でもなく、「野犬」でもない動物の謂である。そして、「野犬」とは、「狼」でもなく、「犬」でもなく、「山犬」でもない動物の謂なのである。

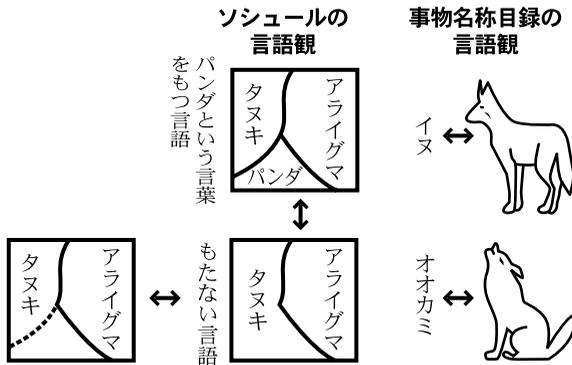
しかして、意味関係論によれば、図表3のIとI'とでは、言語システム（言語体系）が相互に異なると見られる。すなわち、IとI'とでは、言葉の意味を関係的に識別する「分節」（articulation）のあり様が、相互に（相対的に）違っていると見られるのである。分節線により区切られたスペースを網の目（plexus）すなわち単語（言語単位）に、かかる網の目の集合を網目模様（filet, net）すなわち言語システム（言語体系）に見立てるわけである。

ただ、意味関係論は誤解されやすい。言語理論には通じているはずの哲学者にも、ソシュール説に対する明らかな誤読が見られるからである。小阪は下掲のような図解（図表4）をもとに、次のような解説をものしている。

たとえば、オオカミという言葉がなくなれば、今オオカミとわれわれが思っているものにイヌという言葉を使うであろう、というふうに[ソシュールは；執筆者注]言っています。……言語を事物の名称目録だとする観点だと、こういう動物に対してオオカミという言葉が対応し、また別のこういう動物があってそれにイヌという言葉が対応する、とぼくたちは言葉をイメージしています……ところがソシュールの言ったことは、オオカミという言葉がなければ、イヌという言葉

がオオカミも含めた全部を表わすだろう、ということです。……アライグマとパンダとタヌキがあったとして、その民族にパンダという言葉がなかったとすれば、その部分の言語が欠落しているということではなくて、パンダはタヌキに分類されてしまう⁷⁾。

図表4 ソシユール言語観の誤解例



(注) 上図において、タヌキの領域に点線の介在した左下の図は、本執筆者が付加したものである。

「アライグマとパンダとタヌキがあったとして、その民族にパンダという言葉がなかったとすれば、その部分の言語が欠落しているということではなくて、パンダはタヌキに分類されてしまう」ではなく、「アライグマとパンダとタヌキがあったとして、その民族にパンダという言葉がなかったとすれば、その部分の言語が欠落しているということではなくて、パンダはタヌキまたはアライグマに分類されてしまう」というのが正しい。

哲学において、存在と知覚の関係をあつかう領域を存在論 (ontology) という。存在するから知覚できる、つまり存在するから見えるという考え方

7) 小阪修平、『はじめて読む現代思想 I・水源篇』、芸文社、1995年、99～100頁。

を实在論 (realism) という。逆に、知覚できるから存在する、つまり見えるから存在するという考え方もある。観念論 (idealism) という。哲学界では、实在論が多数説で、観念論は少数説である。しかし、観念論はバカげているように見えて、現在も論破されないままなのである。中世の普遍論争以来、千年近くを経ていながら、なお未解決の難問として現在に至っている。

存在と知覚の反映関係について、实在論と観念論は正反対の見方である。しかし、事物 (存在) と知覚 (認知) との間で「一対一の対応」を予定している点では、変わりがない。实在論においては、知覚は事物というオリジナルのコピーと見るのに対し、観念論においては、事物が知覚というオリジナルのコピーと見られる。オリジナルとコピーとの間で、「一対一の対応」が予定されている点では、変わりがない。

他方、全体と部分との関係については、古来より、原子論 (atomism) と全体論 (holism) との対立が看取される。前者は、全体 (whole) は部分 (parts) の集合 (集計) とみる考え方である。後者は、全体は部分の集合 (集計) ではなく、部分の集合 (集計) とは異なる、別個自律的な存在とみる考え方である。全体と部分との関係、この側面から見れば实在論も観念論も、共通して原子論すなわち意味実体論のカテゴリーに属する。

他方、意味関係論は全体論に立脚している。言わば、「はじめに全体ありき」とする。存在と知覚の関係については、全体の分節であるところの単語 (単位言語) が習得されてはじめて、個別の事物が知覚 (認知) されるとする。つまり、はじめに言葉 [(記号=シニフィアン (意味するもの) とシニフィエ (意味されるもの≡概念≡観念) の統合)] があるから、事物が知覚 (認知) されうるとする。すなわち、言葉があるから事物が見えるというわけである⁸⁾。实在論・観念論に対して、丸山はソシュールの意味関係論を「唯言論」(lingualism) と呼んでいる⁹⁾。

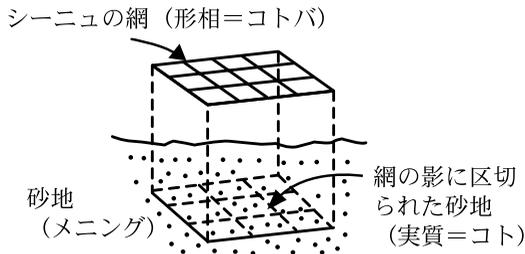
8) 实在論, 観念論, 意味実体論 (原子論), 意味関係論 (全体論), それぞれの存在論の体系付けに関しては、次を参照されたい。前掲拙著, 209~215頁。

9) 丸山圭三郎, 「言語と世界の分節化」, 大森荘蔵ほか編, 「新・岩波哲学講座」, 第2巻, 『経験 言語 認識』所収, 岩波書店, 1985年, 40頁。

Ⅲ 言語の2大機能

イェルムスレウは、ソシユールの意味関係論を巧みに解説している。丸山は図表5を掲げながら、当該イェルムスレウの解説を次のように分かりやすく補説している。「言語は、海辺の砂地の上にひろげられた網のようなものにもたとえられます。その網目が密であれば、砂地には細かく区切られた影が落ちるでしょうし、疎であれば、まばらに区切られた影が映ることでしょう。そして、網を取り去ってしまえば、砂地はもとのままの一面の連続体にかえってしまいます。言語の網次第で、砂地にはさまざまな模様が描かれるのです。」¹⁰⁾

図表5 言語体系=意味体系



「蝶」と「蛾」, 上述言語体系の日仏国際比較からも明らかのように、各国の言語は、事物(実体)の反映である前に、当該特定言語圏に属する人びとの共同価値観を宿している。すなわち、言葉の意味はいつでも客観的な実体にはない。かつ、各国の諸言語は、各々の単語に対し差異(difference)を対立化させただけの、[共同主観(共同幻想)]の産物にすぎない。ソシユール=丸山の主張である¹¹⁾。

10) 丸山, 前掲『言葉とは何か』, 129~30頁。

図表5の出典は次のとおりである。

丸山圭三郎・竹田青嗣, 『記号学批判/〈非在〉の根拠』, 作品社, 1985年, 78頁。

上の図表5をもとに、ともに共同幻想でしかない各国言語（たとえば、日・米・仏・韓、4カ国の言語）間の相違を、仮想的なイメージとして図式化してみよう。図表3をベースに、言語体系を「関係の網」と見れば、4カ国言語間の相違は、たとえば図表6のように提示されえよう。行割り線、列割り線、さらに網全体の面積（空間）とも、現実性とは一切かかわりなく、それぞれ意図的に違えズレを設けている。ここでは、言語体系の恣意性（共同幻想性）のみ了解されれば足り、それ以外は関知される必要がないためである。

図表6に会計の次元も付加しよう。会計には、利益概念システムとして収益費用観と資産負債観の別がある。また、本邦制度会計システムには、商法会計と税務会計の別がある。各国の日常言語がそれぞれ言語体系（意味体系）を相互に違えるものであるならば、会計におけるそれら4組のシステム（ルールの総体）も、それぞれ相互に独立した言語体系と見られよう。図表6では、言語体系（意味体系）としての個別会計システムも重ね合わせて提示している。

図表5および図表6において含意されているのは、われわれの知覚はア・プリアオリ（先天的）な実体（事物）を反映するものではない、というものである。ア・ポステリオリ（後天的）な言語体系を通じて、実体（事物）を知覚するものである。聖書（ヨハネ伝、第1章第1節）に「はじめに言葉ありき」というフレーズがある。ある意味で、「言いて妙」である。ソシュールの意味関係論はキリスト教とは無縁であるが、期せずして、同一命題が内含されている。意味関係論によれば、コトバはいつも〈独り歩き〉して、われわれの知覚（認識）を決定づけている。

ソシュールの唯言論は、「言葉があるから事物が見える」というものである。ソシュール言語学はさておいても、驚いたことに、言葉をもたなければ、われわれは何も見えないのである。これは心理学者・梅津八三の研究（1952年）にも明らかである¹²⁾。先天盲の人が、手術に成功して開眼したとする。

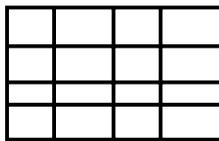
11) 丸山圭三郎、「文化という記号」、『書齋の窓』、有斐閣、第344号、1985年5月号、209頁。丸山圭三郎編、『ソシュール小事典』、大修館、1985年、69、70、77頁。

その人の目にはじめて映ずる外界は、ただまぶしいだけ、何も識別できないというのである。

開眼者はまず、「○」を見せられて「マル」, 「△」を見せられて「サンカク」, 「□」を見せられて「シカク」という言葉を聞かされ学ぶ。それらの言葉を何度も何度も聞かされ学ぶ。かくして、それら言葉を習い覚えてはじめて、たとえば眼前の四角いものが四角く見えてくる。換言すれば、「マル」や「サンカク」との違いが分かっての「シカク」という語を事前に知っていなければ、四角いものも四角く見えないという次第である。

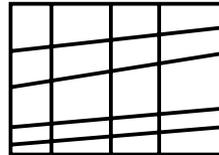
私たちは、既知の言葉をあてがいながら、外界の事物を認識してきたのであり、現在もそうしているのである。言葉とは事物の名前にあらず、逆に、

図表6 言語（文化）の多様性イメージ



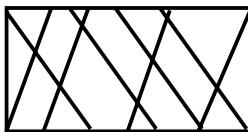
日本語

(または、収益費用観)



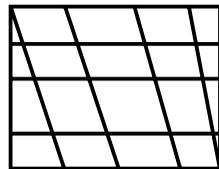
英語(米語)

(または、資産負債観)



フランス語

(または、商法会計)



韓国語

(または、税務会計)



12) 鳥居修晃・望月登志子, 『視知覚の形成 I』, 培風館, 1992年, 25頁。

鳥居修晃, 「先天性盲人が初めて『見た』世界」, 『科学朝日』, 1987年7月号, 25～29頁参照。

事物が言葉の産物だったというわけである。まこと、コトバはいつも独立変数として、私たちの認識を決定づけている。

ソシュール=丸山によれば、言語には次のような2つの機能（働き）があるとされる。

- ① コミュニケーションの便利な手段としての働き
- ② 人間の認識・思考・行動を拘束してしまう働き

意味実体論は、言語の機能としてはもっぱら①の機能のみ想定する。ひるがえって、意味関係論は、①の機能も言語に存することは認める。しかし、その機能は副次的なものであると主張する。②の機能こそが、言語に存する主要な機能であるとする。ひらたく言えば、“言語が異なれば、見える世界も違ってくる”という主張である。

たとえば、次のような問いに、読者はどのように答えるであろうか。

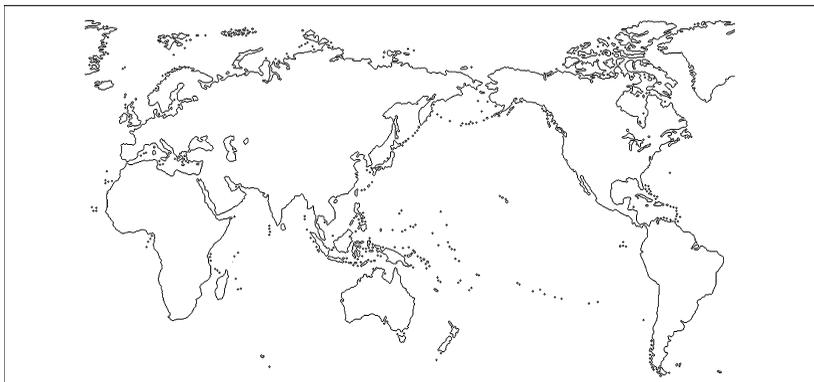
(問1) 虹 (rainbow) は何色か？
なんしよく

(問2) 太陽 (sun) や月 (moon) は何色か？
なにいろ

(問3) ヒゲは唇に生えるのか？

問1の答えには、世界地図を参照したい。ときに、絵画や会計が言語（記号）であるというならば、地図などは言語（記号）の典型と言えよう。地図にあるさまざまな記号は、現地にあるさまざまな事物を意味として表現しているからである。それはともかく、日本や韓国で目にする世界地図は、ふつう図表7のようなものである。日本や韓国が、太平洋を従えるかのように、世界の中心に据えられている。

図表7 日本や韓国における世界地図



図表8 イギリスにおける世界地図

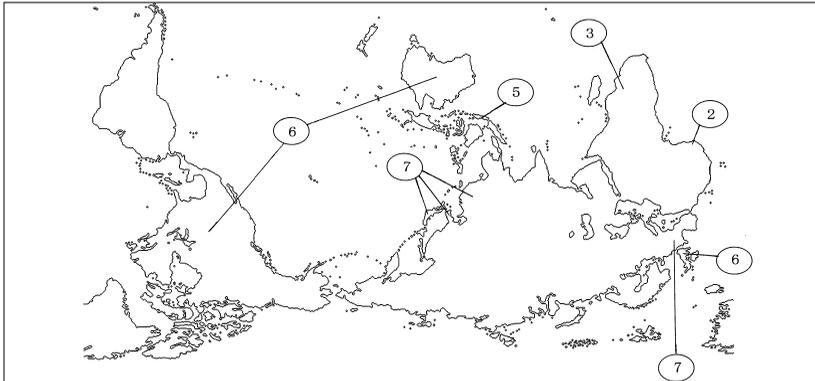


他方、イギリスやヨーロッパを旅するとお目にかかるのが、図表8のような世界地図である。こちらは大西洋を従えるかのようにしながら、イギリスはじめ西欧諸国が世界の中心に据えられている。図表7を見慣れた者に、初対面の図表8は何とも奇異に映る。

それよりも、われわれ日本人や韓国人をとりわけ驚かせるのは、オーストラリアやニュージーランドで掲げられる世界地図であろう。図表9のようなものである。南半球が上に、しかもオーストラリアやニュージーランドが世界の中心に位置付けられている。

図表9 オーストラリアにおける世界地図

(問1) 虹 (rainbow) は何色か？



言語の②の機能，すなわち，真に言語（＝記号＝地図）が人間の認識・思考・行動を拘束するならば，幼児期に3種の世界地図のどれを見ながら成長するかで，その人間のその後の世界観，ひいては認識・思考・行動に大きな影響を与えることであろう。こうした点の，言語としての会計（accounting as language）への係わり様を探ろうとするのが，本稿の狙いである。

図表9をもとに，問1に答えよう。虹を7色に描く，すなわち基本的に虹が7色に見えるのは，日本人，韓国人，中国人，フランス人である。英語圏（イギリス・アメリカ・オーストラリアなど）では6色である。インドネシアでは5色だそうである。また，バッサ語を話すジンバブエのアフリカ人には3色で，ショナ語を話すリベリアのアフリカ人には2色である¹³⁾。アメリカのズーニインディアンたちも5色という¹⁴⁾。言語の違いによって，虹の色数が違って見えている証拠である。

問2に移る。太陽や月は何色か。太陽の色については，国旗に象徴的であ

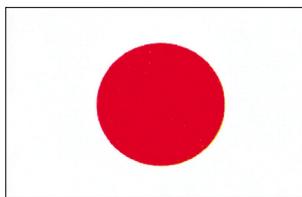
13) たとえば，次を見よ。田中克彦，『言語学とは何か』，岩波新書，1993年，121頁。
 穴戸通庸，「ことばと視点」，穴戸通庸，平賀正子，西川盛雄，菅原勉，『表現と理解のことば学』所収，ミネルヴァ書房，1998年，87頁。池田清彦，『構造主義科学論の冒険』，毎日新聞社，1990年，58～59頁。

14) 池田，前掲書，58頁。

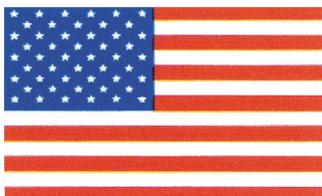
る。図表10から図表14までを参照ねがう。日本語で育てられた子どもたちは、画用紙とクレパスを与えられると、太陽を赤く丸く描く。アメリカやイギリスの国旗に太陽は描かれていないが、英語で育てられた子どもたちは、黄色く丸く描く。絵本に明らかである（図表15）¹⁵⁾。

いったい、太陽は赤いのか黄色いのか。日本人には赤く見えても、黄色く見える国の方が多い。たとえば、カザフスタン（図表12）やキルギス（図表13）の国旗に明らかである。その一方で、台湾（中華民国）の国旗（図表14）は「青天白日旗」と言われる。「青天白日」とは、「空は青く、太陽は白い」の意である。少なからぬ中国人には、太陽は白く見えていることが分かる。言語の違いによって、

図表10 太陽や月は何色か？



図表11 星条旗(アメリカ合衆国国旗)



図表12 カザフスタン国旗



図表13 キルギス国旗



図表14 青天白日旗[台湾(中華民国)国旗]



15) サリー・グリンドレイ（作）＝スーザン・バーレイ（絵）、『空がどうして青いのか、分かりますか？』[韓国語]、クレヨン・ハウス、1998年。

太陽の色彩が違って見えている証拠である。

ソウルで出会った韓国人に、太陽は赤いのか黄色いのか、聞いてみた。「黄色い」と答える者もいれば、「赤い」と答える者もいた。これに関する分布確率データなどあれば興味深いが見当たらなかった。筆者自身になるヒヤリングから得た概算では、赤の方が若干多かったように見受けた。図表16は、その一例である¹⁶⁾。ただし、太陽の赤さは、日本人には「真紅」であるが、韓国人に描かれる赤は「朱色」である。赤は赤でも、ニュアンスには歴然とした差が見られた。

次いで、月の色の違いにも論及したい。一般的に、日本や韓国のように、太陽が赤く（朱色に）見える国では、月は黄色く見える（図表16）。英語圏のように、太陽が黄色く見える国では、白く見える（図表15）。

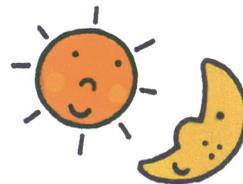
ちなみに、英語圏では、月ばかりでなく、星も白く見える。この点は図表15や星条旗（図表11）に明らかである。日本では、月は黄色でも星は白色が一般的である。これに対し、韓国では、月も星も共に黄色となすのが多数のようである。日本と韓国は、相互に「一衣帯水の国」と言われる。近くに位置しながらも、太陽の赤色（真紅・朱色）のみならず、星の色彩（白色・黄色）でも日韓間で差異が見られる。

今度は、問3に移ろう。「『唇』は英語で『lip』という」。われわれは中学校の英語授業でそう教わった。しかし、言語学者の鈴木によれば、日本語の

図表15 英語圏での太陽と月の色



図表16 韓国での太陽と月の色



16) イ・ジミン（作）＝イ・ジョンギョン（絵），『お日さま，お月さま』[韓国語]，テギョ出版，2002年。

「唇」は、英語の「lip」と一致しないとされる。日本人の感覚では、^{ひげ}髭は唇に生えない。しかし、英語のリップは、「口髭の生える場所」を含意するという。それゆえ、英語の小説などでは、日本語に直訳すると「髭の生えたくちびる」というような、日本語の「唇」の意味では理解しがたい英語表現が随所に出てくるという。

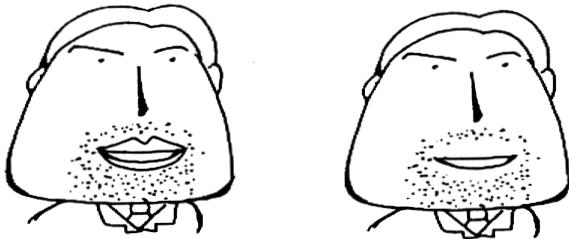
鈴木は、『^{りんご}林檎の木』(*The Apple Tree*, by John Galsworthy) とでも邦訳されうる小説の中に、“with……bearded lips just open” (髭の生えた両唇を少し開けたままで) というフレーズのあることを例示している¹⁷⁾。図表17は、それを図解せんとしたものである¹⁸⁾。左が日本人に見える髭男、右が英語圏の人びとに見える髭男ということになろう¹⁹⁾。

以上の事例が示すのは、まさに、「言語は実在を規定する」ということである。ソシュールはじめ、構造主義言語学派の力説するところである。虹の色数、太陽や月の色彩、髭の所在、それらは各国言語における分節 (articulation) 如何により決定される事柄である。分節は言語の恣意性 (arbitrariness)

図表17 「リップ」(lips)と「唇」は同じ?

欧米人の唇には、髭が生えている

“with……bearded lips just open.” (John Galsworthy, *The Apple Tree*)



(2002 05 13 by Megumi Suzuki)

17) 鈴木孝夫, 『ことばと文化 私の言語学』, 岩波書店, 1999年, 40~41頁。

18) 鈴木めぐみ作画, 2002年5月13日 (作画者は当時, 桃山学院大学経営学部1年生)。

19) 鈴木孝夫の発見によれば, 日本語の「鼻」という言葉が指し示す範囲 (= 網の目 = 意味) は, 英語の「nose」, フランス語の「nez」, ドイツ語の「Nase」, ロシア語

ness) に由来し、ア・プリアリな自然の所産ではない。それは、ア・ポテスリアリな人為(文化)の所産でしかない。換言すれば、分節の如何は真偽の問題ではなく、価値の問題にすぎない。

IV 絵画と会計の類同

絵画(写描)において、虹という対象はさまざまな色数(7色・6色・5色・3色・2色)により表現される。太陽という対象はさまざまな色彩(赤色・朱色・黄色・白色)により表現される。会計においては、財政状態という対象が、貸借対照表というキャンバス上にさまざまな評価概念(収益費用観・資産負債観・非接合観など)により表現される。経営成績という対象は、損益計算書というキャンバス上にさまざまな利益概念(収益費用観・資産負債観・非接合観など)でもって表現される。以上により、対象と表現の関係において、絵画と会計の類同性は明白である。

さらに、絵画における色数表現は、会計における資産や負債・資本の分類表現と相似している。資産の分類については、収益費用観においては3区分される。流動資産・固定資産・繰延資産である。他方、資産負債観においては2区分されるのみである。流動資産・固定資産である。図解すれば、**図表18**のようである。

言語(ラング=語彙・文法規則の総体)は、時間とともに変化する。会計におけるラングについて言えば、たとえば、韓国において1998年12月、企業会計基準が改定された。資産の分類については、収益費用観から資産負債観へと変化した。

の「HOC」、トルコ語の「burun」などのいずれとも、違っている。また、彼によれば、英語の小説では、人間の顔の中で、「鼻」への言及が少ない。つまり、「鼻」の存在感の稀薄であることが指摘されている。これに従うならば、本稿**図表17**における、右の髭男(英語圏)の鼻も、もっと薄ぼんやり描かれる必要がある。彼は言う。「人間の眼というものは、そこにものがあれば、誰にとっても同じように見えるという公平無私のカメラではない。必ずそこには文化的選択[言語的選択; 執筆者注]が行なわれるのである。」

鈴木孝夫、『ことばと文化』、岩波書店、1973年、48~50頁、54頁。

図表18 資産の分類

収益費用観	or	資産負債観										
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td style="width: 30%; text-align: center;">流動資産</td><td style="width: 70%;"></td></tr> <tr><td style="text-align: center;">固定資産</td><td></td></tr> <tr><td style="text-align: center;">繰延資産</td><td></td></tr> </table>	流動資産		固定資産		繰延資産			<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td style="width: 30%; text-align: center;">流動資産</td><td style="width: 70%;"></td></tr> <tr><td style="text-align: center;">固定資産</td><td></td></tr> </table>	流動資産		固定資産	
流動資産												
固定資産												
繰延資産												
流動資産												
固定資産												

負債・資本の分類にかかわる相似例も挙げよう。1980年代に入って間もなく、本邦制度会計諸法規の改正があった。主要な改正点は、引当金規定の整理であった。そのさい、負債・資本の分類区分が、4区分（流動負債・固定負債・特定引当金・資本の部）から3区分（流動負債・固定負債・資本の部）へと変更された。図表19のようである。

図表19 負債・資本の分類

改正前	or	改正後														
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td style="width: 70%;"></td><td style="width: 30%; text-align: center;">流動負債</td></tr> <tr><td></td><td style="text-align: center;">固定負債</td></tr> <tr><td></td><td style="text-align: center;">特定引当金</td></tr> <tr><td></td><td style="text-align: center;">資本の部</td></tr> </table>		流動負債		固定負債		特定引当金		資本の部		<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td style="width: 70%;"></td><td style="width: 30%; text-align: center;">流動負債</td></tr> <tr><td></td><td style="text-align: center;">固定負債</td></tr> <tr><td></td><td style="text-align: center;">資本の部</td></tr> </table>		流動負債		固定負債		資本の部
	流動負債															
	固定負債															
	特定引当金															
	資本の部															
	流動負債															
	固定負債															
	資本の部															

また、絵画における色数表現は、企業結合会計（合併会計）における分類基準とも相似している。日本（JPN）や韓国（KOR）の会計基準では、合併が解散会社（消滅会社）の株主による存続会社への現物出資と見られる場

合には、パーチェス法 (purchase method) によることとされている。また、合併が合併当事会社の株主持分が株式交換など通じて人格的に合体したものと見られる場合には、持分プーリング法 (pooling of interests method) によることとされている²⁰⁾。

他方、米国会計基準 (FAS) ではパーチェス法に一本化されている²¹⁾。国際会計基準 (IAS and/or IFRS) もパーチェス法に統一化する方向にある²²⁾。パーチェス法1本とすることは、色でいうなら企業の合併という対象を同色 (1色) とみる見方である。パーチェス法および持分プーリング法の2本とすることは、色でいうなら企業の合併という対象を2色とみる見方ということになろう。

企業結合会計に対する国際比較を整理して示せば、**図表20**のとおりである。対象を表現するのに、色数の恣意性と分類区分数の可変性にてらし、絵画と会計の類同性はいっそう明らかであろう。

図表20 虹の色数と企業結合会計法

	パーチェス法	持分プーリング法	(虹の色数)
I A S, U S A	○	×	(1色)
K O R, J P N	○	○	(2色)

しかるに、絵画における色彩表現は、会計における繰延資産の扱いと類似している。すなわち、日本において繰延資産扱いされている諸項目の、資産か費用かの識別と類似している。

たとえば、研究開発費について見る。米国会計基準や国際会計基準では、期間費用とされる。韓国の会計基準では、無形資産とされる。日本の会計基

20) 武田隆二、『会計学一般教程』(第6版)、中央経済社、2004年、299頁。

南相午、『会計原理』(第6版)[韓国語]、茶山出版社、2002年、416~417頁。

21) FASB, SFAS141。

22) 経済産業省企業行動課、『財務報告制度をめぐる動向』、2002年7月、5頁。
IFRSにより、2002年第3四半期に公開草案公表の予定とされた。

準では繰延資産である。三者で、それぞれ相違している。

また、創立費（創業費）について見る。米国会計基準や国際会計基準では、無形資産扱いである。韓国の会計基準では期間費用扱いである。日本の会計基準では、繰延資産である。これまた三者で、それぞれ相違している。

太陽の色彩と会計における繰延資産の扱いについて、国際比較を整理したのが図表21である²³⁾。対象を表現するのに、色彩の恣意性と資産・費用識別の可変性にてらし、絵画と会計の類同性はここでも明白である。

先に、コトバの〈独り歩き〉について触れた。もっとも、コトバがしばしば独り歩きすることは、意味関係論者でなくても認識されている。むしろ、それは既にわれわれの「常識」といってよい。

じっさい、コトバの独り歩きについては、その事例にこと欠かない。「少年よ、大志を抱け！」(Boys be ambitious!)は、その一例である。井殿準牧師の解説によれば、この言葉は一般に理解されているような、「立身出世や名声を得るために大志を抱け」という意味ではなかった。クラーク博士（当時、札幌農学校教頭）の真意は、「少年よ、大志を抱け。お金のためや自分だけの立身出世や、また世に言うはかない名声のためでなく、人間としてあるべきすべてのものを達成するためにこそ大きく望みを持ちなさい」というものであった²⁴⁾。得てして、人の言葉は前後文脈などが省かれ、このように独り歩きしがちである。

23) もっとも、研究開発費にせよ創立費（創業費）にせよ、算入される金額について、各国間で相互にズレが存在する。したがって、図表21は厳密な分類ではなく、「研究開発費・創立費（創業費）に含まれる算入金額のうち、期間費用・無形資産・繰延資産に分別計上される小項目がある」というほどの意味で解されたい。

24) <http://www.midorigaoka.jp/preaching.cgi?id=9&page=>

図表21 太陽の色彩と繰延資産の扱い

	研究開発費	創業費	(太陽の色彩)
I A S, U S A	期間費用	無形資産	(黄)
K O R	無形資産	期間費用*	(朱)
J P N	繰延資産**	繰延資産	(赤)

* この処理は、韓国の会計基準書第3号（無形資産）の規定による。韓国の商法では繰延資産、企業会計基準では無形資産として分類されている。

** 日本の上場企業では期間費用として処理される（1988年「研究開発費等に係る会計基準」）。

われわれは先に、上の図表18に関連して、韓国制度会計における資産分類の改定について紹介した。この点につき付言すれば、実は、当該改定は外圧によるものだった。改定に先立つ1997年11月、韓国経済は外貨決済に行き詰まった。国家経済を建て直すべく、韓国は国際通貨基金（IMF）に200億ドルの緊急支援を要請し、その管理下に入ることとなった。緊急支援の交換条件として、韓国に対しIMFが突きつけてきた要求は、会計基準の「透明性」（transparency）ないし「グローバリゼーション」（globalization）であった。

一国の制度会計基準ともなれば、収益費用観から資産負債観への変更は、た易いものでない。日本の状況にてらしても明らかである。たとえば、本邦企業会計原則改定の必要性は議論されて久しいが、いまだ実現には至っていない。これにも端的に表われている。議論百出、「民主化」（この言葉もよく独り歩きする）のレベルが高いほど、変更に要する時間は長いのが普通である。

韓国でも、切羽詰った経済下でIMFの外圧でもなければ、かくも簡単に支配的な会計観が変更になることなどなかった。韓国消息通の弁である。すなわち、「透明性」とか「グローバリゼーション」などは、現代会計における言葉の独り歩きの典型例であろう。「透明性」ないし「グローバリゼーション」

ン」なる言葉の内実が、とりもなおさず「欧米スタンダード化」に他ならないことは、少なからぬ識者にはすでに共通の認識である。

しかし、意味関係論者がいう〈コトバの独り歩き〉とは、「しばしば」ないし「時として」発生するというような、常識的認識とは異なる。彼らが断じてはばからないのは、“コトバはいつも独り歩きする”というものである。上掲図表5および図表6は、かかる前提に由来している。

意味関係論者によれば、実在が言葉を規定するのではない。逆に、言葉が実在を規定すると言うのである。卑近例をあげよう。ストレスがたまると、日本人は『肩が凝る』。が、『ベルギー人は肩が凝らない』²⁵⁾。彼の地の母語(フランス語)に「肩が凝る」という言葉がないためである。「肩が凝る」という言葉がないので、欧米人は『肩が凝る』代りに、「背中が痛くなる」(“I have a pain on the back.”)という言葉のとおり『背中が痛くなる』のである²⁶⁾。韓国人も日本人とは異なる。彼らは「頭の後ろが引っ張られる」(“뒷골이 당긴다.”)という言葉のとおり、身体的にも『頭の後ろが引っ張られる』のである。言葉の実在規定性を示している。

日本人の描く太陽の色彩についても、あるいは、さまざまな異見がありえよう。「日本人が描く太陽が赤いのは、たまたま夕陽を描いたものである」とか、「昼間、青空の下での太陽はまぶしくて色の判別はむずかしいが、白色がもっとも近いのではないか」とか、いう講釈である。しかし、この見方では、おそらく、いまだウソつくことなど知らない、日本の4歳児になる図表22のような絵画について、説得力ある説明はできないであろう。青空の下でありながら、太陽は赤く描かれているからである²⁷⁾。

赤い色については、太陽以外にも同類の現象が存在する。リンゴに対する色のイメージの国際的多様性と、それに係わる着色行為である。一般に、日本人に存するリンゴのイメージ²⁸⁾は赤色である。しかし、フランス人にとっ

25) 飯島英一、『ベルギー人は肩が凝らない』、創造社、2000年、174頁。

26) 内田樹、『寝ながら学べる構造主義』、理想社、2002年、70頁。

27) 江口若那作画、『私と友だち』から。出所は次のとおり。

<http://www.shichida.ne.jp/sakuhinsyuu/kaiga2.html>

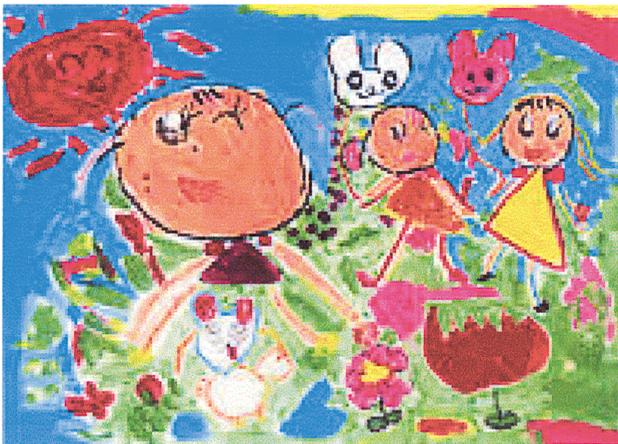
でのイメージは緑色だそうである。英語圏・ドイツ語圏・ロシア語圏では、赤色もあれば緑色もあるという²⁹⁾。

日本人の食するリンゴがもともと赤色のものが多いだけというなら、言語の实在規定性など問題にならない。しかし、赤い色にわざわざ〈着色〉する行為が実存するとなると、問題は別であろう。ありていに言えば、日本では、リンゴは赤くなければいけないのである。たとえば、緑色では未熟と思われるからである。

じっさい、「旭」などという緑色系品種のリンゴは、わざわざ手間をかけて人工着色をしなければほとんど売れないという³⁰⁾。「旭」の他にも、人工

図表22 夕陽だけが赤いのではない！

『私と友だち』



(青空の下でも赤い [執筆注])

28) ソシユール言語学においては、イメージすなわちシニフィエ (signifié) は、言語記号 (signe) そのものである。シニフィエすなわち「意味」は、シニフィアン (signifiant) すなわち「表現」とともに、言語記号を構成する不可分の一体と見られている。

丸山圭三郎、『文化のフェティシズム』、勁草書房、1984年、188～190頁。

29) 鈴木孝夫、『日本語と外国語』、岩波書店、1999年、27～31頁。

30) 上掲書、27頁。

着色の点では、「むつ」、「ジョナゴールド」という品種も同様とのことである。9～10月ごろ、リンゴの実に紙の袋をかけておく。晴天の日にその袋を取り去り、日光に当てる。すると、リンゴは美しく赤く着色し、消費者の購買意欲をそそるとい³¹⁾。

色の概念は、絵画に必須なだけでない。会計とも、大いに係わりがある。現に、「黒字」・「赤字」という言葉がそれを証している。

一例に、イオン（旧ジャスコ）社のケースを取り上げよう。同社は日本における有数の流通業者である。米国でも資金調達しており、日米両国でアニュアル・レポート（年次報告書）を公開している。同社の2000年2月期連結決算（図表23）を見ると、日本の会計基準では151億円の最終黒字であった。しかし、アメリカの会計基準では28億円の最終赤字であった。会計期間はまったく同一でありながら、会計基準の違いにより黒字にも赤字にもなったというところで、評判を呼んだ事例である。

「黒字」・「赤字」は、日本だけのものではない。英語圏では、黒字を‘black figures (or ink)’、赤字を‘red figures (or ink)’という。韓国では、黒字を‘흑자[huktʃa]’、赤字を‘적자[tʃæktʃa]’という。漢字で書けば、日韓とも「黒字」・「赤字」と表記される。会計における概念の〈色付け〉が、日米韓三国で共通している。本稿において、絵画と会計に共通する言語性は、どうやらここでクライマックスを迎えたようである。

絵画にせよ会計にせよ、言語は文化を規定する。文化また、当該文化内人間の価値観を造形していく。言語・文化・価値観とも、自然の所産ではなく、人為になる共同幻想である。それゆえ、言語が異なれば、文化も価値観も多様であってしかるべきである。言語・文化・価値観とも、相対的に一長一短である。

31) この点については、2003年5月12日、加藤農園（栃木県県矢板市）の懇切な説明を得た。

図表23 イオン(旧ジャスコ)2000年2月期連結決算

連結貸借対照表(日本基準)		連結貸借対照表(アメリカ基準)	
(単位:百万円)		(単位:百万円)	
流動資産 (651,829)	流動負債 (778,953)	流動資産 (659,841)	流動負債 (811,335)
固定資産 (1,053,895)	固定負債 (464,062)	固定資産 (850,076)	固定負債 (613,910)
	少数株主持分(93,716)		少数株主持分(94,490)
繰延資産(836)	資本 (371,600)	投資および前払金(90,080)	資本 (313,292)
為替換算調整勘定(1,770)	(うち当期純利益 15,151)	その他の資産 (233,030)	(うち当期純損失 △2833)

[合計金額 = 1,708,332 百万円] [合計金額 = 1,833,027 百万円]

企業の言語としての会計また、多様であってしかるべきである。各国の会計基準また、相対的に一長一短である。たとえば、斯界においてしばしば指摘されるように、資産負債観（国際会計基準・米国会計基準・韓国会計基準）は短期利益ないし支払能力を算るのに有効である。収益費用観（日本会計基準）は長期利益や収益力を算るのに有効である。企業内固定資産の構成比率をメルクマールとして適合業種に論及すれば、前者は流通・サービス業など第三次産業に適合する。後者は製造業など第二次産業に適合する。

学童に対する試験科目にアナロジーを求めれば、かりに資産負債観が算数能力を算るのに似ているとすれば、収益費用観は国語能力を算るのに似ている。図表24は、会計基準と試験科目のアナロジーを一表にまとめたものである。

図表24 会計基準と試験科目

会計基準	国 家	主 要 表 現 内 容	適 合 業 種	(試験科目)
資産負債観	IAS, USA, KOR	短期利益、支払能力	流通・サービス業	(算数)
収益費用観	JPN	長期利益、収益力	製 造 業	(国語)

資産負債観に相対的な長所・短所があるとすれば、収益費用観にも相対的な長所・短所がある。算数はよくできても国語は得意でない学童がいる。逆に、算数はよくできなくても、国語は得意な学童もいる。学童の全人的能力を評価するのに、算数の得点だけに限定することも、国語の得点にのみ限定することも、バイアス・フリーでない。この点は、大方に異論もないことであろう。

ならば、会計また、今や産業の種別、企業規模の大小等を見捨て、全世界的に資産負債観で統一することも、あるいは収益費用観で統一することも、ともに考えものであろう。会計の世界において、「比較可能性およびコスト削減」を名目とする国際会計基準への統一化、「透明性ないしグローバリゼーション」を名目とする欧米会計基準への統一化、共に危険きわまりないことも、もはや明らかであろう。

V む す び

以上の小考につき、われわれなりの結論を要約して示せば、次のとおりである。

- (1) 絵画における色数表現は、会計における構成要素の分類や企業結合会計に相似例が見出される。資産の分類については、収益費用観では3区分（色）、資産負債観では2区分（色）である。本邦における負債・資本の分類は、1980年代に4区分（色）から3区分（色）に変更された。企業結合会計については、米国会計基準や国際会計基準はパーチェス法1本（1色）、日本や韓国の会計基準では持分プーリング法との併用（2色）である。
- (2) 絵画における色彩表現は、会計における繰延資産諸項目の取扱いに類似例が見出される。日本では、研究開発費も創立費も共に繰延資産とされる。この処理を赤い太陽になぞらえよう。米国会計基準や国際会計基準ではそれぞれ、期間費用、無形資産とされる。この処理は黄色い太陽に擬しえよう。韓国会計基準ではそれぞれ、無形資産、期間費用とされる。この処理は朱色の太陽に擬しえよう。

- (3) 〈コトバの独り歩き〉は、日常言語のみならず、会計（企業の言語）にも見られる。外貨危機により IMF 管理下に入った韓国は、外圧により会計基準改定のやむなきに至った。改定の名目は、韓国会計基準の「透明性」ないし「グローバリゼーション」であった。当該「透明性」ないし「グローバリゼーション」の内実は、「欧米スタンダード化」に他ならない。言語論的には、現代会計におけるコトバの独り歩きの典型例である。
- (4) 「黒字」・「赤字」という表現こそは、会計と絵画の言語的共通性を鮮烈に示している。「黒字」・「赤字」という表現は、日本だけのものではない。英語圏では、黒字を 'black figures (or ink)', 赤字を 'red figures (or ink)' という。韓国では、黒字を '흑자[huktʃa]', 赤字を '적자[tʃəktʃa]' という。漢字で書けば、日韓とも「黒字」・「赤字」と表記される。会計における概念の〈色付け〉が、日米韓三国で共通している。
- (5) 資産負債観（国際会計基準・米国会計基準・韓国会計基準）は流通・サービス業など第三次産業評価に適合する。収益費用観（日本会計基準）は製造業など第二次産業評価に適合する。学童の全人的能力を評価するのに、算数の得点だけに限定することも、国語の得点にのみ限定することも、バイアス・フリーでない。すなわち、言語システムとして、試験科目同様、会計基準も多様であってしかるべきである。

(CHUN Jae-Moon／経営学部教授／2004年10月16日受理)

A Study on the Linguistic Character Common to Painting and Accounting

CHUN Jae-Moon

The conclusions reached in this paper are summarized as follows:

- (1) We found that representation in the form of painting using a number of colors resembles the accounting classification of assets, liabilities and equities, and business combination accounting. In terms of the classification of assets, we can classify the revenue and expense view into three classes (colors), and the asset and liability view into two classes (colors). In Japan, the classification of liabilities and equity changed from four classes (colors) to three classes (colors) in the 1980s. As for business combination accounting, only the purchase method (one color) is recognized under U.S. Accounting Standards and International Financial Reporting Standards (IFRS), whereas Japanese Accounting Standards and Korean Accounting Standards recognize both the purchase method and the pooling of interests method (two colors).
- (2) We found that representation in the form of painting using tints resembles the accounting treatment of various deferred asset items. In Japan, research and development costs and organization costs are accounted for as deferred assets. We liken this accounting treatment to a red sun. Under U.S. Accounting Standards and IFRS, these costs are accounted for as period expenses and intangible assets, respectively. We liken this accounting treatment to a yellow sun. Under Korean Accounting Standards, these costs are accounted for as intangible assets and period expenses, respectively. We liken this accounting

treatment to an orange sun.

- (3) The phenomenon of words evolving to take on new and different meanings is not only evident in everyday language but also in accounting (the language of business). Korea, which came under IMF supervision as a result of its foreign currency crisis, was forced by external pressure to revise its accounting standards. The official reason for these revisions was “improved transparency” and “globalization” vis-à-vis Korean Accounting Standards. This essence of “improved transparency” and “globalization” in this context meant bringing Korean standards up to European and U.S. standards. From a linguistics theory standpoint, this is a typical example of “words” taking on new and different meanings in the contemporary accounting sense.
- (4) We see representations of figures being “in the black” or “in the red” as vividly indicative of the linguistic characteristics common to both painting and accounting. The expressions “in the black” or “in the red” are not unique to Japan alone. These expressions also exist in the vocabularies of English-speaking nations and Korea. The notion (color scheme) of accounting profit or loss is common in the three countries Japan, the U.S., and Korea.
- (5) The asset and liability view (IFRS, U.S. Accounting Standards, Korean Accounting Standards) conforms to the appraisal of tertiary industries such as the retail and service industries. The revenue and expense view (Japanese Accounting Standards) conforms to the appraisal of secondary industries such as the manufacturing industry. For example, bias is unavoidable when limiting the appraisal of schoolchildren’s abilities to their scores in either mathematics test or national language test only, but not both. In other words, as a linguistic system, we believe it appropriate that accounting standards should be varied similar to examination subjects.